

分科会テーマ	【第3分科会】地域資源の発掘・発信	
テーマ趣旨、 進め方	<p>地域資源の発掘・発信と題し、それぞれのフィールドでどのような取り組みを行っているか事例紹介を交え議論した。</p> <p>参加者の興味は、「地域の人材をいかに見つけ出すか」が主であった。後半、「自分の地域のネガティブなこと」を洗い出し、それを「とはいえ、〇〇」というようにポジティブに言い換える練習を行った。</p> <p>地域資源とは新たに見つかるものではなく、既にあるもの、見えているものを「資源と言い換えられるか」がポイントであるとまとまった。日々の活動の中では気づかない出来事を少し視点を変えることで、新たな資源と見立てることができる。その他、今後は地域資源の価値付けが必要であり、お金の話にも踏み込む必要がある、と議論が進んだ。</p>	
出席者	<p>大浜 伸人 (特)シミンズシーズ</p> <p>佐藤 秀一 (特)里野山家</p> <p>船引 かをり (特)人と地域の活動応援団ぽっかぽか</p> <p>山本 三千 (特)人と地域の活動応援団ぽっかぽか</p> <p>永菅 裕一 (認特)棚田LOVER's</p> <p>小川 薫 月が丘自治会</p> <p>清水 照男 プラットフォーム淡路島</p> <p>瀬戸口 達郎 青山1000人会</p>	<p>千種 和英 株式会社千種商店</p> <p>中野 広夢 (株)ワンピース「palette」</p> <p>野山 恭一 たちばなNPOプラザ運営委員会</p> <p>橋本 匡史 東条湖おもちゃ王国</p> <p>畑中 久代 cocokara</p> <p>福原 隆泰 いなみ野ため池ミュージアム</p> <p>寺田 良和 佐用町役場</p> <p>大久保 和代 兵庫県企画県民部女性青少年局</p>
ファシリテーター	畑本 康介 (特)ひと・まち・あーと	ゲストスピーカー 佐伯 亮太 合同会社Roof
<p>事例・話題提供</p> <p>○話題提供 佐伯 亮太(合同会社Roof)、畑本 康介(NPO法人ひと・まち・あーと)</p> <p>そもそもなぜ地域資源の発掘と発信が必要なのか？ 頭ごなしに「人がいないから人を探さない」となっていないか？ まずは、いる人あるものでできることを進めることが大切。</p> <p>【事例1】 横浜市の商店街活性化について</p> <p>昼間賑わうが、夜には閉まってしまう商店街を数ヶ月に1度、ナイトバザーと題して夜まで開けてみる。すると、地元にいる子育て世代(主に30代)がたくさんやってきた。</p> <p>彼らは昼間、遠方で働いており商店街が開いている時間に、まちにいない。「時間を変えることで新たな人材を発掘した。」</p> <p>【事例2】 たつの城下町について</p> <p>「むかしみらい」の切り口でまちを捉え直している。まちの人が「そんなん当たり前やん」ということが、外の目で見ると大変魅力的に映ることがある。</p> <p>まちのPRをするとすると、どうしても観光的になってしまうが、たつのの場合は「まちの暮らし」を伝えていこうとしている。この視点が変えることが地域資源の発掘につながる。</p> <p>○視点を変えてみよう！「自分の関わる地域・団体の弱みを言い換えてみると」</p> <p>(手順)自分の関わる地域・団体のネガティブな面をふせんに書き出す。「とはいえ」とつなぐことで、視点を変えて強みに言い換えてみる。</p> <p>例: 子供が少ない→(とはいえ、)→1人ひとりを地域で見守れて、みんなで育てていける。</p> <p>この言い換えをベースにそれぞれの地域や課題について議論を進めた。</p>		

意見の概要

○論点1「人がいなくて困ってる。どうしたらいいだろうか？」

・なぜか、地域を語る時に「人がいること」が前提になることが多いが、中山間地は本当に人がいなくなっている。これからどうしていくかが課題だ。たまにワークショップをやるとアイデアは出てくるが、それ止まり。結局実行する人がおらず前に進まない。

(上記意見に対して) やってくれる人には遠慮なくお金を渡したほうが良いと思うがどうだろうか？ → お金のお話をすると地域から嫌われたことがあり、難しいと思う。

・一番の問題は地域内で明らかに課題が発生していても、それに気づかないこと。気づいていても見てみぬふりをする。自治会長など、地域の課題は地域内の責任のある人が熱意を持って動けば、必ず人はついてきてくれる。どんな意見にもブレないで活動を続けることが大切だと思う。

(事例) 月が丘自治会では、子どもたちのためにそうめん流しをやったところ、30人のボランティアが集まってくれた。「自分の子どもが楽しませてもらってるから、ちょっとでも手伝おう」という父兄がいたから。

○論点2「地域の価値は自分たちでつけられる」

・これまで、特に田舎は「ここにはなにもない」や「こんなちょっとだけ作ったもの売ってもしゃーない」と言って、自分たちで作った農作物や花などの価値を自分たちで下げたり、無くしてしまっていた。せっかく良い資源があるのに、それを資源だと気づかないままだった。

これをなんとかしたいと思って始めたのが元町マルシェ。まちの人が喜んで買ってくれるようになった。今では定着し始めたが、最初は地元でお金のお話をすると煙たがられていた。次の世代のためにも、ちゃんと「価値付け」をすることが大切。

○論点3「若者が地域に興味ないと言うがほんと？」

・よく年配の方から「若者は地域に興味がない」と聞くと、自分の周りの若者は興味があって関わりたがっているがうまくいかない。例えば、地元でデザイナーをやっている人がいる。技術もセンスもあって信頼できるのに、地域の人はお金を払って頼もうとしない。

地域への関わり方はすべて無償では成り立たないと思う。これからはきちんとお金の話にも踏み込んで行く必要があると思う。

まとめ

【ファシリテーター総括】

今日、この分科会に参加されたみなさん、ぜひ活動されている地域内外で「つなぎ役」になっていってください。団体同士はもちろんのこと、行政との間にも入ってみてください。更にご最近は民間企業も地域活動に興味を持ち始めています。「なにもない」と言うってしまう前に、もう一度地域を見直してみると、意外とコラボできそうな人や団体がいるかもしれません。ぜひそのつなぎ役になって、地域資源をどんどん発掘してください。